

## 「いる」ことについて

田中康裕，合同会社 Ibasho Japan

### ■はじめに

本稿の考察のきっかけとなった言葉を紹介したい。ある居場所の運営に携わる方から伺った言葉である。

「今どこに行っても、〔居場所の〕立ちあげの目的は介護予防・健康寿命延伸のためと紹介されます。結果そうであることを願いますが、……、参加される全ての方にとって日々の生きる喜びや楽しみ、自己実現の場であり、結果、地域に生きる安心につながることを願っています。」

居場所の意味、あるいは、居場所を対象とする研究の意味を、「介護予防・健康寿命延伸」など社会において既に確立されたものに対する効果として語るのではなく、「いる」ことそのものを語る。そのために、「いる」とはそもそも何かを考察すること。本稿著者がこの言葉から受け取った問題提起である。居場所とは人が「いる」ための場所であるため、「いる」ことの考察は、居場所の本質に関わる考察になるはずである。

本稿は、日本語文法論の知見を参照することで、「いる」と、何かを「する」という人の行動を比較し、「いる」ことは、人の行動でなく、居合わせている観察者によって認識される状況であること、そして、観察者を含めた人間・環境系の「単位」として捉えることができることという仮説を提示する。

### ■「いる」と「する」

本稿著者が運営に関わる岩手県大船渡市の「居場所ハウス」\*1) について、ここに来て何をしていいかわからず、薪ストーブにあたってのぐらしかすることがないという話を聞いたことがある\*2)。居場所とは人が「いる」ための場所であり、運営においては人が「いる」ことをどのように実現するかが重要になる。ただし、このような話が出されるように、「いる」ことの実現はいつも容易というわけでない。

ある場所に他者と「いる」時、間がもたないと感じることがある。自分がある場所に「いる」ことが場違いな気がして、周りの他者からなぜここに「いる」のかという視線を向けられていると感じること

がある。このような時、何かを「する」ことで、間をもたせようとしたり、他者からの視線を避けようとしたりする\*3)。このことから、「する」ことは「いる」ことを可能にするものだと考えることができる。薪ストーブにあたってのぐらしかすることがないという話は、薪ストーブにあたっていれば「いる」ことができたとも捉えることができ、薪ストーブにあたるという「する」ことが「いる」ことを可能にしていたのである（図1）。



図1 「居場所ハウス」の薪ストーブ

「する」が「いる」を可能にすることについて、臨床心理士・臨床心理学者の東畑開人（2019）は、居場所型デイケアにおける経験をふまえ、次のように述べている。

「何もしないで『ただ、いる、だけ』だと穀潰し系シロアリになってしまった気がしてしまう。それがつらいので、それから何か月ものあいだ、僕は何かをしているフリをすることにした。

……

何か『する』ことがあると、『いる』が可能になる。」  
（東畑開人，2019）

東畑開人（2019）は、その一方で、「する」ことは、「いる」ことが前提となっているとも述べている。

「カウンセリングを『する』、授業を『する』、そしてこうやって原稿を執筆『する』。そうやって何かを『する』

とお金がもらえる。それが僕の日常だ。

でも、それって、僕がそこに『いる』ことが前提となっている。」(東畑開人, 2019)

環境心理学者の木下寛子(2020)は、小学校における自らのボランティアの経験を考察している。小学校でのボランティアを始める前、『毎週同じ曜日に少なくとも半日程度、朝からお昼までの時間を小学校での時間として充てること』をまずは半年間継続すること、「言われたこと、頼まれたことなど、できることを何でもやるつもりで行くこと」という「二つの心得」が伝えられたという。前者は「いる」こと、後者は「する」ことに関わる心得と捉えることができるが、「二つの心得」について、木下寛子は次のように「する」こと以前に「いる」ことが容易でなかったと振り返っている。

「私は友人と共に2001年6月14日から、『ボランティア』としてこの小学校を訪れ始めた。当然、私達は心得のとおり、『できることは何でもする』意気込みで臨んだ。しかし、小学校に行ってみると、そもそも『何でもする』以前に、そこで半日を過ごすこと自体が存外に容易ではなかった。」(木下寛子, 2020)

薪ストーブにあたれば「いる」ことができる(居場所ハウス)、「何か『する』ことがあると、『いる』が可能になる」(東畑開人, 2019)というように、「する」ことは「いる」ことを可能にする。その一方で、何か「する」ことは「そこに『いる』ことが前提となっている」(東畑開人, 2019)、「小学校に行ってみると、そもそも『何でもする』以前に、そこで半日を過ごすこと自体が存外に容易ではなかった」(木下寛子, 2020)というように、「する」ためには「いる」ことが必要である。このように、「いる」と「する」は互いに支えあっている。

互いに支えあう「いる」と「する」はどのような関係にあるのか。2つの「する」という行動であれば、例えば、「歩きながら、話す」、「話をしながら、歩く」、あるいは、「歩きながら、本を読む」、「本を読みながら、歩く」というように2つの「する」を同時に行えるか、同時に行うのが難しいかと議論することができる。けれども、「いる」と「する」の場合、例えば、「いる」と「座る」は同時に行えるように思われるが、「いながら、座る」、「座りながら、いる」と普通は言わない。普通は言わないというのは

感覚的なことだが、この言語感覚は、「いる」は「する」と異なるもの、つまり、人の行動でないことを示唆している可能性がある。

## ■ 浅利誠による日本語文法論

「いる」と「する」が異なるものである可能性についてみてきたが、「いる」と「する」の違いを直接的に考察することは困難である。そこで以下では、フランス語話者に日本語を教えるという経験に基づく日本語文法論を展開している浅利誠の議論を手掛かりとして、考察を進めることとする。

浅利誠は、「格助辞の選択は、イメージ類型を考慮した場合には、動詞の選択によって、自動的に決定される」(浅利誠, 2017)という重要な指摘を行なっている。例えば、図2のように「に」、「を」、「で」という場所格の格助辞は、「水戸」、「公園」、「商店街」という場所でなく、「行く」、「歩く」、「遊ぶ」という動詞によって「自動的に決定される」。

Q: (■)の部分には「に」、「を」、「で」のどれがあてはまるか?		
水戸 (■) 行く	公園 (■) 行く	商店街 (■) 行く
水戸 (■) 歩く	公園 (■) 歩く	商店街 (■) 歩く
水戸 (■) 遊ぶ	公園 (■) 遊ぶ	商店街 (■) 遊ぶ

図2 動詞の選択による場所格の格助辞の決定

浅利誠の議論は、人間・環境学会が追求してきた人間と環境との関係を捉えるというテーマを考察するための大きな手掛かりになる。人間・環境学会では、人間と環境の関係を、特に両者を切り離さず、一元論的なものとして捉えることが追求されてきたが、次のように「人間と環境」と表記したり、説明したりする時点で既に人間と環境を分離して捉えてしまっている可能性があること、研究行為が「人間・環境」を反省的に捉えようとするがゆえにかえって人間と環境との分離をもたらしてしまうことなど、このテーマを追求することの難しさが指摘されてきた。

「そもそも『人間と環境のトランザクション』と表現あ

るいは説明する時点で『人間』と『環境』が分離している。あるいは、研究行為が人間・環境を正に反省的に捉えることで人間と環境の便宜的分離を強制するとも言える。現在は、この矛盾を解消できないまま、人間・環境学において、一方に理念としてのトランザクショナルリズム、他方にそこから遊離した相互作用論に基づく具体的諸研究の累積が並立する状況ではないか。」(太田裕彦, 2012)

「環境と行動、環境—行動、あるいは人間と環境との相互関係、といった表現に含意される二元論的立場は、陥りやすいがおそらく妥当なものではなく、環境と行動とが一元論的に統合されたものとして観念されねばならぬと筆者は考えている。」(舟橋國男, 2004)

浅利誠の議論は、人間と環境との関係を、場所格の格助辞に注目して考察するアプローチの可能性を示すものである。

浅利誠の議論がさらに興味深いのは、場所格の格助辞の「に」と「を」をとるのは限られた動詞であり、本稿で注目している「いる」はその限られた動詞に含まれるという指摘である。

浅利誠は、「の、が、と、に、へ、を、で、から、まで」の9つの格助辞のうち、「に、へ、を、で、から、まで」の6つの場所格の格助辞を「に類」(に、へ、から、まで)<sup>\*4)</sup>、「を」、「で」の3つに分類し、「に類」をとる動詞を「ある」、「いる」、「見える」などの「現前動詞」、「住む」、「滞在する」などの「滞留動詞」、「行く」、「着く」、「来る」などの「方向関与移動動詞」、「を」をとる動詞を「歩く」、「通る」、「渡る」などの「方向非関与移動動詞」、「で」をとる動詞を「に類」と「を」をとる以外の全ての動詞であると整理している。

浅利誠は、日本語では「格助辞だけが空間性(イメージ表象)を喚起させる」と指摘し、「に類」が喚起する空間性を「場所が動作(動詞)に対して点として表象され、その場所が矢印によって示される」という「矢印と点」、「を」が喚起する空間性を「動作(動詞)が場所と接触点を有する形で表象される」という「矢印と接触点」、「で」が喚起する空間性を「動作(動詞)が円形の枠内において行われるという場面として表象される」という「円による包摂」と述べ、それぞれの弁別特徴を「分離」、「接触」、「包摂」と整理している(浅利誠, 2008, 2017)。

以上が、浅利誠が提示する「《場所・格助辞・動詞》

システム」である(図3)。

場所格の格助辞	動詞		空間性 (人間の行動と環境に関するイメージ表象)	
	に類 (に、へ、から、まで)	現前動詞 ある、いる、見える…	滞留動詞 住む、滞在する…	方向関与移動動詞 行く、着く、来る…
を	方向非関与移動動詞 歩く、通る、渡る…			「動作(動詞)が場所と接触点を有する形で表象される」
で	上記以外の全ての動詞			「動作(動詞)が円形の枠内において行われるという場面として表象される」

\*浅利誠(2008, 2017)をもとに作成  
 \*\*空間性(イメージ表象)の図のみ、「2017年10月27日浅利誠 山本哲士対談」(<https://www.youtube.com/watch?v=H50DnryZ6U>)をもとに作成。

図3 浅利誠による「《場所・格助辞・動詞》システム」

ここで、浅利誠の議論における空間性について補足しておきたい。浅利誠(2017)によれば、「単音節の格助辞は、非意味的なものであると言って差し支えないものである」ため、「空間性」、「イメージ表象」、「イメージ類型」と表現されているものは、格助辞がもつ意味を表すのではない。浅利誠は、「これらのイメージ表象は、発話者の頭の中にしか存在しないものであり、客観的に(外在的に)存在するものではない。その点では、『ティマイオス』(プラトンの「コーラ Khôra」(あるいは道元の「古鏡」)を通して思念される空間表象の在り方に近似していると言えるだろう」と指摘している。

以上の議論をふまえれば、場所格の格助辞が喚起する空間性とは、人間の行動と環境との関係についてのイメージ表象のことであり、発話者の頭の中にある人間の行動と環境との関係についてのイメージ表象が、結果として「に類」、「を」、「で」という格助辞の使い分けとして現れると考えることができる。

動詞の中には、複数の場所格の格助辞をとるものがある。浅利誠(2017)は複数の場所格の格助辞をとる「例外と見なしうるような動詞」の例として、「登る」が「山を登る」、「山に登る」というように「を」と「に」をとる場合があること、「出る」が「家を出る」、「家から出る」、「裏道に出る」というように「を」と「から」と「に」をとる場合があることをあげて、どの格助辞をとるかは「イメージ類型を使えば簡単に区別可能である」と指摘している。浅利誠が、動詞の選択による場所格の格助辞の決定について、「イメージ類型を考慮した場合には」という留保をつけているのは、このような「例外と見なしうるような動詞」があるからである。

## ■「に」をとる動詞

浅利誠によれば、「いる」は「に」をとる動詞、人の行動である「する」は「で」をとる動詞ということになる。この議論をふまえることで、「いる」と「する」の違いを、「に」と「で」の違いという切り口から考察する道が開かれる。ここでは、「に」をとる動詞である「現前動詞」、「滞留動詞」、「方向関与移動動詞」についての議論を参照することで、「に」をとる動詞にどのような特徴があるかを考察する。

「現前動詞」について、浅利誠は次のように指摘している。

「私は、『ある、いる、見える』を（ハイデガーに対する立ち位置として）『現前動詞』と呼んでいるのである。存在論で言うような意味での『ある』ではなく、『現前する／現前しない』という二項対比によって『機能する』語詞とみなしているということなのである。その限りでは、私の意見では、『ある、いる、見える』は『同形の機能』を持つカテゴリーの動詞なのである。鈴木胤のように、『ある、いる、見える』を形容詞とみなすことも可能であると考え。さらに一歩進めると、『ある』と『滞在する（住む、留まる、残留するなど）』とは非常に近い語詞であると思う（実はハイデガーにおいてもそうである。）」（浅利誠, 2017）

「いる」について、批評家の小浜逸郎（2018）は、「『いる』は、その語られている状況に自分自身がひそかに参入して、その状況と『私』とが親しく居合わせていることを表しています」と指摘している。

「に」をとる「方向関与移動動詞」における方向とは、日本語学者の森田良行（2006）が次のように指摘するように、話者の視点によって定まるものである。

「自己の視点を基点にして、『彼は走って行く。／走って来る。』と話者側から遠ざかるのか接近しているのかを、話者自身の目を通して叙述していく。」（森田良行, 2006）

「現前動詞」の現前とは、話者にとっての現前である。「方向関与移動動詞」における方向は話者の視点によって定まるものである。さらに、「状況と『私』とが親しく居合わせている」、「話者自身の目を通して叙述していく」と指摘されているように、「に」をとる動詞は話者と密接に関わるという特徴がある。

浅利誠が「に類」の弁別特徴を「分離」としていることに対して、山本哲士（2011）は、「浅利は『分離』とってしまうのだが、それは括弧にいれておきたい、述語的非分離の助詞であるからだ」と指摘している。山本哲士によれば、非分離は「二つにして一つという関係性、独立していながら関係が分離していない、結合もしていない、合一されることではない、未分化でもない、ある形成された対の関係状態であるが、行為において現出する」と説明される\*5)。山本哲士による「非分離」は、話者と密接に関わるという特徴を指摘するものだと捉えることができる。

## ■居方

建築計画学者の鈴木毅は、「居方（いかた）」という概念を提示している。「居方」とは「人間がある場所に居る様子や人の居る風景を扱う枠組み」である。

「建築計画学の分野は、人々の生活行為や行動に注目し、多くの研究の蓄積がある。しかし多くは、『睡眠』や『食事』といった『行為』と空間との対応関係を問題にしており、『ただ居る』『団欒』などの、何をしていると明確に言いにくい行為はうまく扱えない。つまり『個人』の『曖昧な行為』をも含んだ、人が実際に場所に居る時の様子をきちんと分析する手法、言い換えれば、実際にその場で体験されている、生活の場の質を扱う方法論が十分確立していないのである。」（鈴木毅, 2004）

「『ただ居る』『団欒』などの、何をしていると明確に言いにくい行為」を扱うという指摘から、「居方」は、人間の行動である「する」でなく、「いる」を扱うことを狙いとするものだと考えることができる。ここでは「居方」について、場所格の格助辞の観点からの考察を試みたい。

鈴木毅（2004）は「居方」の類型として、「都市をみているあなた」、「公共の中の自分の世界」、「たたずむ」、「あなたと私」、「居合わせる」、「思い思い」、「行き交う」、「都市を背景として」、「都市を見降ろす」、「都市の構造の中に」をあげている。10の「居方」のうち、動詞のみで表現されているのは「たたずむ」、「居合わせる」、「行き交う」の3つである。「たたずむ」は「何もせずに遠くをボーっと見ている人の全身が周囲から見えている」状況、「居合わせる」は「別に直接会話をするわけではないが、場所と時間を共有し、お互いどの様な人が居るかを認識

しあっている状況」、「行き交う」は「色々な方向から人々がやってきて、立ち止まって時刻表を見たり待ち合わせをしたり、通りすぎたりしていく様子を……眺めることができる」状況と説明される「居方」である。3つの動詞がとる場所格の格助辞を、現代日本語書き言葉均衡コーパスのオンライン版「小納言」\*6)を用いて調べると、「たたずむ」、「居合わせる」は主に「に」をとること、「行き交う」は主に「を」をとることを確認することができた(図4)\*7)。

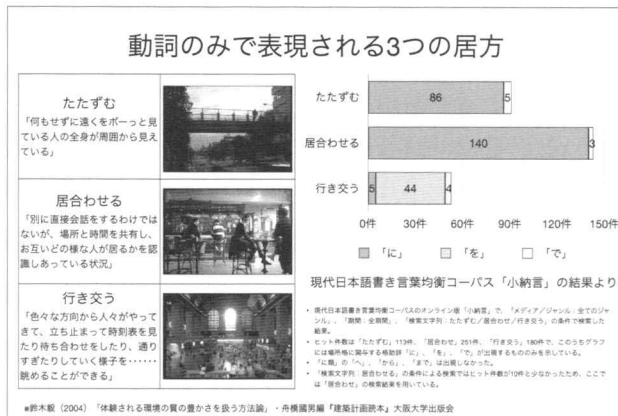


図4 「たたずむ」、「居合わせる」、「行き交う」

ほとんどの動詞が「で」をとるという浅利誠の議論をふまえれば、「居方」は限定された動詞によって表現されていることがわかる。主に「に」をとる「たたずむ」、「居合わせる」について鈴木毅は次のように述べている。

「何もせずに遠くをボーッと見ている人の全身が周囲から見えている時に、はじめてたたずむといいやすいように思う。つまり『たたずむ』とは、動詞でありながら、観察者との関係で初めて定義される状態なのである。たたずむ人の周囲には違う時間が流れるように思う。」(鈴木毅, 2004)

『誰かに気づかれずに居合わせる』といういい方をしないことから分かるように、これも他人との関係の中で生まれてくる状況といえます。(鈴木毅, 2000)

「観察者との関係で初めて定義される状態」、「他人との関係の中で生まれてくる状況」と述べられているように、「たたずむ」、「居合わせる」は、他者が何かを「する」という行動を記述するのではなく、観察者と他者との関係が生み出す状況を記述している。つまり、「たたずむ」、「居合わせる」が記述する状況

には、観察者も含まれている。ここにも、先にみた「に」をとる動詞が話者と密接に関わるという特徴をみることができる。

### ■他者の認識としての「いる」

居場所の運営においては、人が「いる」ことを実現するために様々な配慮がなされているが、ここで、居場所において「いる」がどのように語られているかをみることにする。

「初めて来た人は、できるだけ外回りに座ってもらおう。そうすると、あんなことも、こんなこともしてる姿が見えてきますね。すると、色んな人がいていいんだっていうメッセージが、もうそこへ飛んでいってるわけですね。」(「実家の茶の間・紫竹」運営者の発言)\*8)

「お互いにそれぞれが自分のところに座ってて、誰からも見張られ感がなく、ゆっくりしてられるっていう。だけでも、『何か困った時があったよね』って言った時には傍にいてくれるっていう、そういう空間って必要だなあと思ってね。」(「親と子の談話室・とぼす」運営者の発言)\*9)

「あんなことも、こんなこともしてる姿が見えることが「色んな人がいていいんだっていうメッセージ」を伝えることになる、「誰からも見張られ感がなく、ゆっくりしてられる」というように、「いる」ことが見るというかたちでの認識に言及しながら語られていることがわかる。

先に紹介した木下寛子(2020)も、小学校でボランティアをするうえでの「毎週半日を過ごし続ける」という「いる」に関わる心得について、次のように「先生達や子ども達に私達を見てもらい」と、見るというかたちでの認識に言及しながら振り返っている。

『毎週半日を過ごし続ける』という心得は、私達がボランティアとして小学校のなかに受け入れられるために必要な時間をなんとか耐え通すことを促してくれるものとして受け取られるようになった。そしてこの時間とは、一にも二にも、先生達や子ども達に私達を見てもらい、私達の活かしどころを見出してもらえるようになる時が来るのを『待つ』時間を意味していた。(木下寛子, 2020)



「に」をとる動詞には話者と密接に関わるという特徴があった。「たたずむ」、「居合わせる」という「居方」は、他者が何かを「する」という行動を記述するのではなく、観察者と他者との関係が生み出す状況を記述するものであった。さらに、「いる」ことは見るといふかたちでの認識に言及して語られていた。

以上より、「いる」は、「する」という行動でなく、観察者の認識が生み出す状況を記述するものであり、その状況には観察者も含まれていると考えることができる。

## ■ 「に」と「で」

「に」をとる動詞についてみてきたが、「で」をとる動詞も話者が観察したものを記述すると言えるため、「で」をとる動詞も話者と無関係でない。そこで、ここでは「に」をとる動詞と「で」をとる動詞の違いを確認するため、「に」と「で」の両方をとる動詞に注目する<sup>\*10</sup>。具体的には、「居方」の類型である「居合わせる」、「たたずむ」と、「座る」という3つの動詞に注目し、これらの動詞がどのような場合に「に」をとり、どのような場合に「で」をとるかを考察する。

### □ 「居合わせる」

本稿著者は、『日本建築学会計画系論文集』に投稿された論文を対象とする次のような考察を行った。『日本建築学会計画系論文集』に2021年12月までに投稿された論文のうち、「居方」の概念を用いて考察や分析を行っている論文は25編ある。25編の論文のうち、「居合わせる」が、「に」とともに用いられているのは5編の5カ所、「で」とともに用いられているのは2編の3カ所ある。それぞれどのような状況が記述されているかに注目すると、「に」とともに用いられている場合には、同じ属性の人々の関係が生まれる状況や、異なる属性の人々が同じ空間にいる状況が記述される傾向があり、「で」とともに用いられている場合には異なる属性の人々の関係が生まれる状況が記述される傾向があることを見出すことができた（田中康裕, 2023）。

### □ 「たたずむ」

環境心理学者の松本光太郎（2020）は、特別養護老人ホームにおけるフィールドワークに基づき、高齢者の暮らしを細やかに記述している。本稿著者は、松本光太郎の書籍で「たたずむ」<sup>\*11</sup>という表現が多

数用いられていることに注目し、どのような場所格の格助辞とともに用いられているかを整理した。これにより、11カ所用いられている「たたずむ」のうち、「に」とともに用いられているのは、「強風は、目的地に向かって進むことを拒み、同じ場所に佇むことを許してくれない」の1カ所、「で」をとともに用いられているのは、「夕方、フロアのテーブル周りで多くの居住者が佇んでいた」、「……居住者が集まって作業しているとき、島田さんはその輪に加わらずに、輪の近くで佇んでいた」、「その外縁で佇むことを望む居住者、移動することを望む居住者、立ち去ることを拒む居住者がいた」の3カ所であることを確認することができた。「に」とともに用いられている場合は「同じ場所」に言及されているのに対して、「で」とともに用いられている場合は「多くの居住者」、「集まって作業している」居住者に対する「島田さん」、「外縁」が言及されている。

### □ 「座る」

本稿著者が執筆した「居場所ハウス」についてのフィールドノーツにおいて、「に」とともに用いられている「座る」は107ヶ所、「で」とともに用いられている「座る」は4ヶ所ある。そして、「で」とともに用いられている「座る」を含む文章が、どのような状況を記述しているかに注目すると、本稿著者自身を含め誰かが1人で座っていたり、全員が同一の「焦点の定まった相互作用」<sup>\*12</sup>に関与したりする状況でなく、多様な属性の人々が、同一の「焦点の定まった相互作用」に関与しない状況という傾向を見出すことができた（田中康裕, 2024）。

「居合わせる」、「たたずむ」、「座る」について、それぞれ異なる資料を対象とする考察を行うことで、「に」とともに用いられている場合に記述されている状況は、1人であることを含めて人数が少ない、同じ属性の人、同じ空間という傾向がみられ、「で」とともに用いられている場合に記述されている状況は、人数が多い、異なる属性の人、外との接点という傾向がみられることが明らかになった。

浅利誠の議論をふまえれば、発話者の頭の中にある人間の行動と環境との関係についての空間性の違いが、結果として「に」、「で」という格助辞の使い分けとして現れると考えることができた。そして、浅利誠は「に」が喚起する空間性を「矢印と点」、「を」が喚起する空間性を「円による包摂」と整理してい

た。「居合わせる」、「たたずむ」、「座る」が記述している状況が、「に」とともに用いられている場合と「で」とともに用いられている場合とで異なるのは、記述しようとしている状況に対して観察者が抱く空間性が異なるからだと考えることができる。

観察者が抱く空間性の違いをもたらすものは何かについての考察は今後の課題となるが、ここでは観察者の視点という側面からの考察を試みたい(図5)。

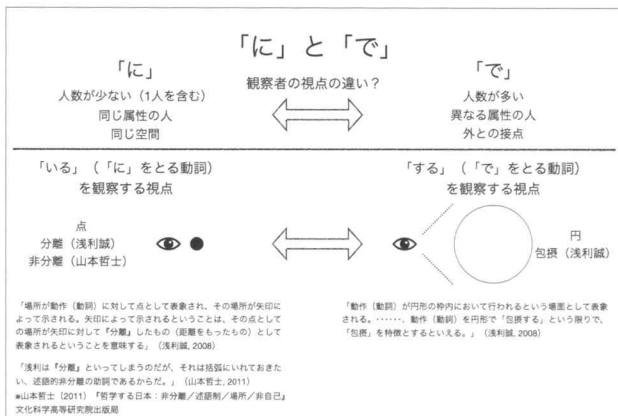


図5 「に」をとる動詞と「で」をとる動詞

### ■観察者の視点

日本語学者の森田良行は、日本語と英語の話者の視点の違いを、次のように「鳥類型」、「爬虫類型」と整理している。

「日本人は話者自身を指す『私』の視点で周りの事物や人物をとらえる。常に己との関係で自分を取り巻く対象を把握する。そのような対象とは客観的な存在としての事物ではなく、あくまで自己とどのような関係にあるかによって存在の意味を持つ『私』中心の観念であったといっよい。」(森田良行, 1998)

「日本語の発想は、高みから下界を一気に見下ろす鳥類型というよりは、地面を這って進む爬虫類型、蛇のように前へ進みながら進行方向を適宜変えていくことの許される恣意性の高い言語ということができそうである。」(森田良行, 1998)

言語学者の金谷武洋は、森田良行の「鳥類型」と「爬虫類型」の分類をふまえ、「鳥は動くが、英語等の話者の視点はむしろ不動である。地上の出来事を上空から見下ろす話者の視線と意識は、全知全能の父なる神のイメージである」、「印象として蛇の動きは素早い、虫はゆったりと動き、回りの環境に

対してより受身である」などの理由から、「神の視点」と「虫の視点」という表現を提案している。

『神の視点』の方は不動である。言語化されようとしている状況から遠く身を引き離して、上空からを見下ろしている。そしてスナップ写真の様に、瞬間的に事態を把握する。時間の推移はない。『虫の視点』はその反対で、状況そのものの中にある。コンテクスト(文脈)が豊かに与えられている。そしてこの視点は時間とともに移動する。」(金谷武洋, 2019)

「に」をとる動詞には、「状況と『私』とが親しく居合わせている」(小浜逸郎, 2018)、「話者自身の目を通して叙述していく」(森田良行, 2006)と表現されるような話者と密接に関わるといった特徴があり、これは、「状況そのものの中にある」と表現される「虫の視点」の特徴と合致する。

建築計画学で用いられる調査方法に、平面図を用いたマッピング調査(行動観察調査)がある。建築における人々の行動を観察し、それを、平面図上にプロットしていく調査方法である。平面図とは、一般的にも使われる住宅の間取り図のように、建築を真上から見下ろした表記方法だが、実際には人は建築を真上から見ることはできないため、建築を平面図のようなかたちで見ることが不可能である。つまり、平面図とは「神の視点」を仮構した図面の表記方法ということになる。本稿著者がかつて協力したマッピング調査を振り返ると、読み取った行動は全て「で」をとる動詞で表現されるものであった(図6)。マッピング調査によって「に」をとる動詞を記述できず、「で」をとる動詞しか記述できなかったことから、「いる」は「神の視点」を仮構する調査方法によっては記述できない可能性がある。

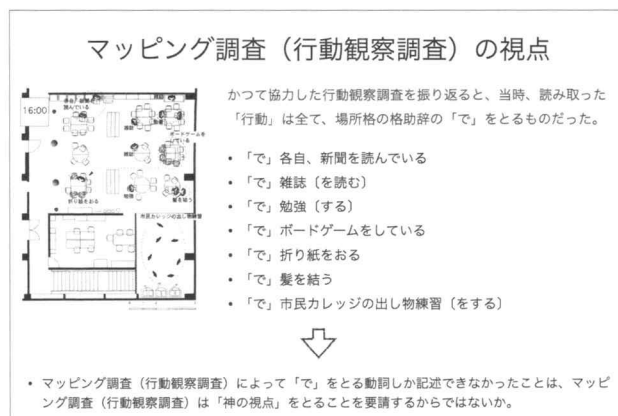


図6 マッピング調査の例

「居方」は「する」でなく「いる」を対象とするものだが、鈴木毅(1994a)は「居方」の写真を使って建築を議論したところ、「ある研究者から『こういう情緒的なスライドを使って建築を論じようとするのはよくない』という意味のコメントを頂戴したことがある」というエピソードを紹介している。「居方」の写真を情緒的に感じてしまうのは、「居方」が状況に入り込んだ「虫の視点」を通して記述するものだと考えることができる。

森田良行、金谷武洋による話者の視点の議論は、日本語と英語を比較したものだが、「虫の視点」は「に」をとる動詞の特徴と合致し、「神の視点」を仮構する調査方法では「いる」を記述できない可能性があること、「いる」を対象とする「居方」は「虫の視点」をとると考え得ることをふまえれば、「いる」を観察する者の視点は、「虫の視点」になっている考えることができる。そして、「虫の視点」をとる観察者は、小浜逸郎の次の表現をふまえれば、その状況に居合わせていると表現することが可能である\*13)。

『「いる」』は、その語られている状況に自分自身がひそかに参入して、その状況と『私』とが親しく居合わせていることを表しています。」(小浜逸郎, 2018)

「いる」を、居合わせている観察者が認識する状況と捉える場合、自分が「いる」ことをどのように理解するかについて、最後に補足しておきたい。考察の手がかりは、次のように指摘されているように、自分が「いる」ことは、「いづらい」状況で意識されることにある。

『「いる」が難しくなったとき、僕は居場所を求める。居場所って『居場所がない』ときに初めて気がつかれるものだ。』(東畑開人, 2019)

「私の『本当の自分』とは、このような執筆の作業や議論の場所を十分な形で『ある』のではなく、ごく私的な仲間と歌ったりする遊びのときに『居る』のである。そしてその瞬間、自分があるなあとか、居場所があるなあと意識していることは少ないし、むしろ、依存している場所を失って初めて『自分がない』『居場所がない』と意識されるものである。」(北山修, 2003)

これらの指摘をふまえれば、「居場所ハウス」に來ても何をしていいかわからず、薪ストーブにあたっ

てるぐらいしかすることがないと話していた人は、「いづらい」状況を認識していると考えることができる。

自らの「する」に没頭している時には「いる」を意識することはなく、逆に、自らの「する」に没頭できていない時に、「いづらい」というかたちで「いる」が意識される傾向がある。この時、自分が、自らを観察している状況が生まれていると考えることができる。

## ■自分の周辺としての環境

本稿の考察より、「いる」は、人の行動でなく、居合わせている観察者によって認識される状況であり、そのように認識している観察者を含めた人間・環境系の「単位」として捉えることができる。そして、「いる」という状況の観察者とは、「虫の視点」をとる観察者として、他者を観察する場合に加えて、自らの「する」に没頭できない時に「いづらい」というかたちで「いる」を認識する場合があると考えることができる。

人間・環境系の「単位」に関して、松本光太郎(2010)は次のように指摘している。

『人と環境は一体のものである』というテーゼを見出すためには、人と環境全体を見渡す存在、いわゆる神のような視点を必要とする。しかし、人と環境全体を見渡す神のような視点を私たち人がとることはできない。それらの点からも、環境とは自分という主体を中心にして周囲に存在するものと考えるのである。

以上から、環境には主体を中心とした周囲とその外という分節があり、環境とは主体を中心にして周囲に存在するものとして位置づけることができる。」(松本光太郎, 2010)

本稿の考察より、「自分という主体を中心にして周囲に存在するもの」としての環境とは、居合わせている観察者による「虫の視点」によって認識されるものだと考えることができる。

## ■注

\*1) 「居場所ハウス」をはじめ、本稿で紹介する居場所の具体的な運営については、田中康裕(2021)を参照。

\*2) 2014年2月12日のフィールドノートより。

\*3) 社会学者のアーヴィング・ゴッフマン(1980)は、社会には『無目的』でいたり、何もすることがないという状態を規制するルールがあると指摘し、例えば、「仕事中に『休憩』したい人は、喫煙が認められているところへ行って、そこで目だつ



ように煙草を吸う」、「瞑想や睡眠を隠すため」に「魚などはいないから自分の瞑想が妨げられるおそれのない河岸で『魚釣り』をしたり、あるいは浜辺で『皮膚を焼いたり』する」などの例をあげている。そして、「無為の行為を公然と示してそれを正当化するには、……、特別のユニホームを着用しなければならないのであろう」と指摘する。

- \*4) 浅利誠 (2008) では、格助詞 (格助辞) が「で」、「を」、「その他すべて」(が、に、へ、と、より、から、まで) の3つに分類されているが、本稿では浅利誠 (2017) の分類にあわせて、「その他すべて」を「に類」に置き換えて捉えている。なお、本稿の以下の部分では、「に類」を「に」と表記する場合がある。
- \*5) 浅利誠自身も、山本哲士との対談において、「に」の分別特徴を「分離」と表現する必要はないと述べている。  
「2017年10月27日浅利誠 山本哲士対談」  
(<https://www.youtube.com/watch?v=H5dXNlyZcU>) より。
- \*6) 現代日本語書き言葉均衡コーパスは、大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所と文部科学省科学研究費特定領域研究「日本語コーパス」プロジェクトが共同で開発したコーパス。本稿で用いているのは、現代日本語書き言葉均衡コーパスのオンライン版「小納言」である。
- \*7) 現代日本語書き言葉均衡コーパスのオンライン版「小納言」で、「メディア/ジャンル: 全てのジャンル」、「期間: 全期間」、「検索文字列: たたずむ/居合わせ/行き交う」の条件で検索した結果である (検索日は2022年4月22日)。ヒット件数は「たたずむ」113件、「居合わせ」251件、「行き交う」180件で、ここでは場所格に関与する格助辞「に」、「を」、「で」が出現するもののみを示している。「に類」の「へ」、「から」、「まで」は出現しなかった。「検索文字列: 居合わせる」の条件による検索ではヒット件数が10件と少なかったため、ここでは「居合わせ」の検索結果を用いている。なお、おおよその傾向を把握することが目的であるため、「佇む」、「居あわせる」、「行きかう」など漢字とひらがなの表記の違いでは検索していない。田中康裕 (2023) では、「で」をとる「たたずむ」を「6」としていたが、本稿では集計を見直し「5」に修正している。
- \*8) 2016年8月1日のインタビューでの発言。
- \*9) 2005年2月19日の座談会での発言。
- \*10) 先にみたように浅利誠 (2017) は複数の場所格の格助辞をとる「例外と見なしような動詞」として「のぼる」、「出る」をあげているが、あげられている例はいずれも「に類」と「を」の使い分けであり、「に類」と「で」の使い分けでない。
- \*11) 松本光太郎 (2020) では「佇む」と漢字で評価されているが、本稿では、引用部分を除き、鈴木毅の「居方」の表記にあわせて「たたずむ」と表記している。
- \*12) 社会学者のアーヴィング・ゴッフマン (1980) は「人びとのコミュニケーション行為」を「焦点の定まらない相互作用」と「焦点の定まった相互作用」の二段階に分けている。「焦点の定まらない相互作用」は「その場にいる別の人が自分の視野に入る時に、その人を一瞬ちらりと見て、その人に関する情報を集める場合に起こるコミュニケーション」で「相手とただ居合わせたにすぎないような状況をどう処理するかという問題に主としてかかわってくる」。これに対して、「焦点の定まった相互作用」は「人びとが近接して、話を交互にしながら注意を単一の焦点に維持しようとはっきりと協力しあう場合に起こる相互作用」である。
- \*13) 「居方」は「虫の視点」をとることをみたが、鈴木毅があげる10の「居方」のうち、「居合わせる」以外の9の「居方」は、「虫の視点」をとる観察者が他者の状況を記述するものであり、観察者自身が、例えば、「たたずむ」、「行き交う」わけでないのに対して、「居合わせる」だけは観察者も「別に直接会話をするわけではないが、場所と時間を共有し、お互いどの様な人が居るかを認識しあっている状況」(鈴木毅, 2004) に「居合わせる」ことができるという違いがある。このことは、「居合わせる」状況の説明において、「感じる」、「わたしが感じる」、「感覚である」というように、観察者である鈴木毅自身が「居合

せる」状況に入り込んで感じたことが記述されていることに現れている。「パリでカフェやレストランに入るたびに感じるのは、日本のお店に比べて、何だか気持ちよく食事ができることだ。なぜなのか長年の疑問だった。」、「要するにこれも『居方』の問題—具体的には同席している人達との関係なのだ。こういうと『そうそう、欧米のレストランは演劇的なんだよ。みんな着飾ってやってきてお互い「見る一見られる」関係があるんだよ。日本もああなりたいね」としたり顔で言う人がいそうだが、わたしが感じるのはこういう演劇的なものではなく、もっと単純に『(別に会話をするわけではないが、この人達と) ここにいっしょに居られてよかったな』という感覚である。」(鈴木毅, 1994b)。「居合わせる」を記述する観察者は、「虫の視点」をとりながら、自らもそこに居合わせている。

#### ■参考文献

- ・浅利誠 (2008) 『日本語と日本思想: 本居宣長・西田幾多郎・三上章・柄谷行人』藤原書店
- ・浅利誠 (2017) 『非対称の文法: 「他者」としての日本語』文化科学高等研究院出版局
- ・太田裕彦 (2012) 「人間・環境学のパラダイム再考: トランザクショナルリズムを踏まえて」・『MERA Journal』第29号, p.36
- ・金谷武洋 (2019) 『述語制言語の日本語と日本文化』文化科学高等研究院出版局
- ・北山修 (2003) 「自分の居場所」・住田正樹 南博文編『子どもたちの「居場所」と対人的世界の現在』九州大学出版会
- ・木下寛子 (2020) 『出会いと雰囲気学の解釈学: 小学校のフィールドから』九州大学出版会
- ・ゴッフマン、アーヴィング (丸木恵祐, 本名信行訳) (1980) 『集まりの構造: 新しい日常行動論を求めて』誠信書房
- ・小浜逸郎 (2018) 『日本語は哲学する言語である』徳間書店
- ・鈴木毅 (1994a) 「居方という現象: 「行為」「集団」から抜け落ちるもの」・『建築技術』pp.154-157, 1994年2月号
- ・鈴木毅 (1994b) 「「居合わせる」ということ」・『建築技術』pp.210-213, 1994年6月号
- ・鈴木毅 (2000) 「人の「居方」からの環境デザインの試み」・住環境研究所 JKK ハウジング大学校編『JKK ハウジング大学校講義録 I』小学館スクウェア
- ・鈴木毅 (2004) 「体験される環境の質の豊かさを扱う方法論」・舟橋國男編『建築計画読本』大阪大学出版会
- ・田中康裕 (2021) 『わたしの居場所、このまのち。: 制度の外側と内側から見る第三の場所』水曜社
- ・田中康裕 (2023) 「行動観察調査に関する基礎的考察: 居方と日本語文法論から」・『日本建築学会計画系論文集』Vol.88, No.806, pp.1237-1248
- ・田中康裕 (2024) 『「居合わせる」状況の記述に関する一考察: 日本語文法論による『フィールドノーツ』の分析』・『日本建築学会計画系論文集』Vol.89, No.816, pp.208-219
- ・東畑開人 (2019) 『居るのはつらいよ: ケアとセラピーについての覚書』医学書院
- ・舟橋國男 (2004) 「トランザクショナルリズムと建築計画学」・舟橋國男編『建築計画読本』大阪大学出版会
- ・松本光太郎 (2010) 「トランザクションという単位の有効性」・『MERA Journal』第26号, pp.69-78
- ・松本光太郎 (2020) 『老いと外出: 移動をめぐる心理生態学』新曜社
- ・森田良行 (1998) 『日本人の発想、日本語の表現』中公新書
- ・森田良行 (2006) 『話者の視点がつくる日本語』ひつじ書房
- ・山本哲士 (2011) 『哲学する日本: 非分離/述語制/場所/非自己』文化科学高等研究院出版局